絵空ごと

吉田健一

絵空ごと

吉田健一

河出書房新社

絵空ごと　定価六八〇円　©1971

一九七一年七月十日　初版印刷
一九七一年七月十五日　初版発行

著　者——吉田健一
装　幀——飯島啓司
発行者——中島隆之
発行所——株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
電話……(〇三)二九二—三七一一
振替……東京一〇八〇二

印　刷——亨有堂印刷
製　本——中西製本

0093—037130—0961

絵空ごと

Ecrasez l'infâme.—Voltaire.

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

1

この頃の東京は東京でないと言ってしまえば簡単である。併しそれで東京に住んでいるものはどうすればいいのか。尤もその場合も色々と分けなければならないに違いなくて、そこに住むものの多くが今日では自分がどこにいようと全く無頓着な人種である時に東京がどんなであっても少しも構わない訳であるが、それが東京にとって別に喜ぶべきことなのではない。どこの町でもそこが他所でも構わない人種というのは有難くないものでそういう人間の数が殖えるに従って町が町らしくなくなる。これは全く妙なものである。又そんな風に町が

町でないのがやり切れないものも別にいて、そこが曾てはその町だったことを知っているものにとってはなお更である。それでどこでもそこの地着きのものがいなければならないということになるのであるが、ここでもとの話に戻って、それならば東京に長年住み馴れて今でも東京にいるものはどうすればいいのか。

不思議なことに、例えば溜池の昔は電車の停留場があった所が高速道路を被せられてどこなのか見当が付かなくなっていてもその上の高速道路を通って渋谷辺から浜松町の方へ行く途中、自分が東京ではないどこか他所の町に来たとは思わない。そこから眺めれば普通は新たに出来た建物に隠されている目印も見えるからということもあるかも知れないが、それならばそこからでは却って見えない目印もあってそのようなことよりも高速道路からの眺め全体が明かに東京の町というもので他所と取り違える余地がないのである。これは戦後の東京の変り方を思えば怪んでいいことで道路の高さからすれば二十年前には郊外の緑が眼に映った筈の所が今は建物に埋められているのにやはり自分は東京にいるのだという感じがする。或は別な例を取るならば、浅草は戦争中に全焼してその後に何もかも建て直されたのであるから今の浅草の仲見世ならば仲見世を写真に取って三十年前のと比べるならばその二つが同じ場所であると考えられる訳がなくても浅草に実際に行って仲見世を歩けばそこは紛れもない浅草の仲見世である。

そうした事情の説明は抜きにして、それ故に今日の東京にも東京が残り、それを拠りどころに確かな生き方をしている人間もいる。落合勘八もその一人で、勘八は四谷に住んでいた。この四谷もどこまでが焼けてどこが昔通りに残っているのか、その残っている所も大部分建て直された今日では見当も付かないが四谷三丁目と四丁目の間で電車通りから少し入った横丁に昔のままの家が両側に並んでいるのがあって、その一軒を勘八は空襲で焼け出された直後に旨い具合に手に入れることが出来た。つまり、それから又焼け出されずにすんだということで、その後に何度か修繕はしても大体が初めにそこに来た時と少しも感じが違っていないのに就ては勘八はいつも昔の大工仕事がしっかりしたものだったのに驚いていた。そこの小さな庭は戦争中のことで原形を留めないまでに荒れ果てていて勘八は戦争が終るまでそのままにほおって置き、それから植木屋に来て貰って家に釣り合うようなものに作り直した。

その為に今はそこの前を通ると戦前から誰かが住んでいて戦災も免れ、それからずっと手入れを怠らないでいる家と庭という風に見えた。尤もその横丁一帯の家がこれは勘八と違って戦前からそこに住み付いていた人達の持ちものらしくて余程古くなって痛んでいるのでなければ新築もせず、手入れも行き届いていて、新築すれば先ずもとそう違わないものが代りに建ち、その辺を歩いていると今は東京に珍しくなった屋敷町というものの気分がしないでもなかった。その屋敷町なるものの最も大きな特徴は凡てがひっそりしていて目立たない

ということで、この頃の屋敷というのは金が掛っていることが何よりも目立つからそういうのが並んでいる所は屋敷町よりも新式の新築の展覧会に迷い込んだ感じがする。併しそれよりも勘八は自分の家を出たりそこに戻って来たりすればその辺には人間が住んでいるのが解ることに満足した。これは季節毎に方々の庭の様子が変ることでも明かで、自分が住んでいる所に愛着があれば庭の植木にも念を入れることになる。

のみならず四谷の町並が勘八の眼には昔からの四谷に映った。これは四谷見附に赤坂離宮の方に向っての緑があることから始り、新宿に行く電車通りが広い割にその両側に小さな店ばかり並んでいる具合もはっきりそこが四谷であるのを感じさせた。もともと勘八は四谷の住人ではなくてただ東京にいて見馴れた四谷だったのであるから昔の店がもとの場所に残っているかという風な細かいことは解らなかったが、それよりもそこの通りを歩いていて向うに小さな果物屋があるとそれが如何にも四谷の電車通りの果物屋なのでその店が新築しただけで昔からそこにあったという気がした。その感じを強める為よりも自分が或る所に住んでいることを確認するのに幾つかの決めた店にいつも行くことが大切で、そうして決めた店と勘八ももう何十年かの付き合いになっていた。本当は表通りを歩いていてどの店とも又そこの主人とも馴染みであるのが自分が故郷と呼べるものにいることなのであるが、それには四谷の通りが大き過ぎた。

そういう店の一つに四谷見附から新宿の方に向って最初の角を右に曲った横丁に酒場があった。そこは他にもその種類の店が沢山並んでいる所だったが勘八はその酒場にしか行かなかったからその名を挙げる必要もない。勘八がそこへ行き出したのは戦争が終って酒場などというものが闇ででも又商売を始めてからのことだった。併し解せない感じになるのは戦争になって最後まで踏み止った酒場や飲み屋が東京の所どころでまだ店を開けていた頃その酒場で何度か飲んだという記憶のようなものがあることで、それに従えば店は同じでも場所は四谷でなくて新宿の盛り場だった。勘八が四谷に移ってから最初にただ気紛れにその店に入って行った時に一目でそこに前に確かに来たと思い、それからそれが新宿だった筈であることが直ぐに頭に浮んで来てそこの所が怪しくなった。併し入って正面に酒場の止り木があってその向うに店の主人らしいのが立って働いている具合も、止り木の上の日本間ならば鴨居に当る所に掛けた小面の能面が古いものなのではなくて酒場の埃で黒ずんでいるのも見覚えがある気がしてならなくて、それでももしその主人らしいのがそこの主人ならばこれは知らない人だった。

向うもその店の給仕達も勘八を振りの客に扱ったのは代が換ったということで説明が付いたが二つの違った場所に同じ一つの店があるのはやはり不可解で、これはそのまま謎になって勘八の頭に残り、それが一種の魅力になって四谷で洋酒を飲む時にはそこと決めたからや

がて勘八は主人とも給仕達とも馴染みになり、ただその店がどうして新宿から四谷までそっくりそのまま持って来られたのかというようなことは幾ら酔っても聞けなかった。その店の壁に止り木の上の能面と別に関係があるとも思えない楕円形の金額に入った十九世紀風の鏡や明治初期の錦絵が掛っているのも眺めているうちに確かに前に見た覚えがある気がして来て、ただその為に勘八はその方に眼をやり、それは自分が同時に二つの場所に、或は過去と現在の両方にいる快感に似ていた。そこで出す飲みものも悪くはなかったが、これは酒場に置いてある程度のものならば今日では東京でも世界のその他どこでも先ず同じだと言える。

前に見たことがあるのかどうか、そこの主人にも勘八は何か惹かれるものがあった。初めからバーテンだったのでも途中から例えば道楽が病み付きになって本職のバーテンになったのでもそのどっちでも可笑しくない年輪、或は風格がその日焼けした顔に現れていて、無駄口を利かなくて親切なのも余計なことに頭を悩まさなくなったのから生じるゆとりに取れた。それが店の流儀にもなっているようで給仕達にも及び、そこではただ飲んでいればいい安心が勘八だけに止らないらしくてその店にはそこの定連があった。勘八が早くからその一人だったことは言うまでもない。そういう店の定連だったから身元も何も知れている一つの町内のもの同士がその溜り場に集るというのとも違って、その店に来る客を勘八は大概知っていて親しく口を利く間柄になっていながらその銘々がどういう商売のものかは勿論のこと名前

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

さえも余りはっきりしていないのが多かった。その店のそういう所も勘八の気に入っていた。

この辺で勘八自身が何をしていたか書いて置いた方がいいかも知れない。勘八は何もしていなかった。併しその半生を振り返って見ると大抵のことはしたようで、そうして何度も商売を変えたのは失敗ばかりしていたからではなくてその逆だった。その一番初めは友達に頼まれて捨て値で買った土地が法外に値上りしたのがきっかけで暫くやっていた不動産の売買だったが、これは当分使い切れそうもない財産が出来ると続けるのが意味がなくなったので止めた。その次はやはり頼まれて一口乗った私鉄会社の設立だっただろうか。これも当って勘八はいい加減な時に役員を止めた。そんな風にやって見ては止めたことの順序など覚えていられるものではなくて、それを思い出そうとするとただ切れぎれに頭に浮ぶものがあり、まだ昇降機というものがない頃にビルの四階にある事務所まで階段を登って行く所や、自分が乗っている船が艀に引かれて神戸港を出て行くのや、ドイツの鉄工場で視察の一行から離れたのを見咎められてしどろもどろの返事をしているのが僅かな間記憶に戻って来るだけだった。南太平洋で黒真珠の養殖をしたこともあってこれは外国の市場向けだったから派手だったが、その黒真珠も笊に入れて持って来られると何故そんなものが珍重されるのか解らなくなった。又戦後は闇物資というものがあり、それで今は又何もしていなかった。

そんなことで世が渡れるものではないと思ったりするのも小説を読み過ぎるからである。

併し兎に角、四谷の酒場で飲んでいる勘八は生活の手段を生活と取り違えて金が入って来ることを生活の保障と考える程の馬鹿、或は現代人ではなくてそこは確かに東京の、又東京というような抽象的なことでは話にならないならば東京にある四谷の酒場だった。或はその店が新宿にあった気がするのも新宿で行っていた店とそこに共通の性格の中でも著しいのが一軒の店である感じが克明である点にあるからではないかとも思い返された。昔はそれが当り前なことで今はそれを探さなければならないのはただそれだけのことで、もし自分が立っている地面が水に浸されて来たならばどこかまだ水の上に出ている所を見付けて廻らなければならず、それがなくて水が増す一方ならば何れは溺れ死にするのだろうが、まだ死ぬ時が来ていなければ水の方でそのうちに引き始める。

或る冬の日の午後、昼寝から覚めて天気がいいのでその店まで歩いて行って煙草を吸っていると又一人客が入って来て勘八がいる卓子の前で立ち止り、

「元さんの画廊が店開きするんだそうです、」と言った。

それで少くともその元さんというのは一種の画商、或は画商の仕事もする人間だったことが解る。その店開きのことを言ったのも勘八がその酒場で仲よくなった人間の一人で何か会社をやっているらしいことを人と話している時の様子などで勘八も知っていた。併し親しくなったのはそういうことと関係がなくてその小峰さんというのがただそこで飲んでいてもそ

れがその小峰さんという人間の世界の一部での出来事でその世界がどういうものなのか見当も付かないままに確かにどこかに、或はそこに小峰さんの世界がある感じがすることが勘八には魅力があった。それならば寄っ掛って来られる心配がないのも気持がよかったが、この小峰さんを前に置いてまだ自分が知らない景色がもう少しで眺められるのではないかという思いをすることが勘八に自分もそうした一つの世界に住んでいるのではないかということに気付かせた。そうなると人間というのが懐しいものに感じられる。

その日も元さんの画廊のことは一応それだけで打ち切りになって二人はまだ電気が付かなくて外からの日差しが床の一部に及んでいる中で飲み始めた。それはウイスキーで、いつまで飲んでいても別にどうということがないのがその日の午後に似ていた。小峰さんも何を言っても変な風に取られるのを気にしないでいられる程度には勘八と親しくなっていて、

「日本でもの凄く上等なウイスキーっていうのを飲んでも大して旨くないのは妙ですね、」

と感想を述べた。

「そう、それだからこの位ので丁度いいんでしょう。その本場から遠過ぎるんでしょう。尤もその本場と言っても、――」

「そう、ウイスキーと同じ色をした水が流れている川に小さな石の橋が掛っていて、橋を渡った先の飲み屋の前を汚れた毛の羊の群が通っている。その飲み屋に入れば小さなウイスキ

ーの樽が幾つも逆さに止り木の向うの壁に取り付けてあるという所ですか。」
「その通りですよ。よく本場っていうことを聞かされるけれど、それがどんな本場なのか、外国ならばどこでも本場なんですかね。それじゃここはどこなんだ。」
「併し外国にいてここのことを思い出すこともあるんだからここも四谷の本場なんでしょう。こういう小さな店が沢山並んでいる横丁が昔から四谷にあった。」
勘八はそれを聞いて自分が確かにそこにいるのを感じた。そうするとその延長で東京の町が拡って行って、
「元さんの画廊を覗いて見ましょうか。そうしないと義理が悪いでしょう、」と言った。
「今直ぐでなくてもいいでしょう。どうせお祝いの会か何かがあって、それが早く終る訳がない。」
夕方になってそこを出ると二人は元さんの画廊がある銀座に行く車を電車通りで拾った。四谷見附に立てばそこが四谷であるのにそこから赤坂の方に降りて行く赤坂と四谷の境目に当る濠端がどことも付かない全く荒涼たる感じがするのは妙である。これはお濠や昔の宮家の庭木が見馴れたもの、或は兎に角前からあったものであるのに対して高速道路や新たに出来たホテルその他がまだそれ程眺めの中に溶け込んでいない為だろうか。その証拠に赤坂見附を越すと溜池まで大体これまでと同じ感じの建物が並び、その全体の様子から赤坂に来た

気がし、溜池を過ぎて新橋に向えばその辺が昔からのそこであることはもう間違いない。それが新橋、銀座の歴史というものかも知れなくて、その点では確かに赤坂というのが戦前から何か宙ぶらりんの性格の町だった。併しこれは例えば新橋駅から数寄屋橋の方に行く通りの建物が昔と少しも変っていないというようなことではなくて、その或る町角に元さんの画廊があるのが勘八と小峰さんが探しているうちに見付かった。

その画廊は小さなもので元さんが直ぐに二人の方にやって来た。その日が店開きなのだから振りの客も入っていたが、奥の部屋にこの頃よくあるような立ち食いに立ち飲み式の会の用意がしてあってそこの戸の所に「立入禁止」という札が貼ってあった。小峰さんがそのことを元さんに言って笑った。

「ここで余り盛大にやると誰かあの札を剝がして入って来ませんかね。」

「いや、中を見てここは他所の料理屋だと思うでしょう。序でにあの店をここの応接間と間違えて是非ここに掛っているこの絵を譲ってくれなんていうのが出て来るといいんだけれど。」

そう言えばその店は絵が割にあるのからすれば画廊だったが全体の作り方は寧ろ絵の数が少くない余り大きくない応接間で、その方へ奥の部屋から出て行って又奥に戻って来るのが一軒の家の中にいる気分を壊さなかった。勘八も一度店の方を見て廻りに出掛けて元さんと

小峰さんがいる所に戻ると今度は小峰さんが出て行って勘八が戻って来た小峰さんと顔を見合せると次に二人とも元さんの方を見た。元さんがにやにやして、

「どうです、」と言った。

勘八はそれで漸く納得出来てもう一度絵を見に行った。そのどれも殆ど例外なしに前に見たことがある名画の贋もので、元さんが自分で言っているのだから贋ものに違いなかったが、それにしても贋ものの絶品で寧ろ肉筆でやった精巧な複製という種類のものだった。どんなに発達した方法による複製でも肉筆の味は出せなくて、勘八は一枚一枚の絵の前に立ちながら何十年も前に行った切りの外国の美術館にいる錯覚を起し掛けた。それは殆どその頃の自分に戻る感じでコローの湖が背景になっている絵では前景の木の枝が絵具の一かすりであるのにもう一度震え、レオナルドのベアトリチェ・デステの肖像では人物が真横を向いている効果を改めて不思議なものに思った。勘八は絵などというものに見切りを付けてから大分になっているのでそれだけ容易にただ夢中になっていた昔の自分に戻れたのかも知れなくて、それでこれも何十年振りかにこれだけの絵の中でどれか一枚と言われたらどれにするだろうという考えが頭に浮んだ。勿論そんなものがある訳がなかった。

勘八が又店の方に行った後で小峰さんは、

「確かに名前も何も書いてありませんね、」と元さんに言った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.